

反キリスト教国アメリカ『レフト・ビハインド』 シリーズの背後にある聖書解釈の伝統—

山 本 貴 裕*

“An Anti-Christian America: The Interpretive Tradition behind the *Left Behind* Series”

Takahiro Yamamoto

The 12-volume *Left Behind* series (hereafter LBS) by Tim LaHaye and Jerry Jenkins has sold more than 62 million copies since the publication of the first volume in 1995 and has become the best-selling non-fiction series for adults in U.S. publishing history. The America depicted in the series is incorporated, early on, into the new world order controlled by the “Antichrist.” Furthermore, there is a continuity between some of the policies carried out by the Antichrist in the LBS and those that have been adopted by George Bush, Sr. and George Bush, Jr. since the early 1990’s. In other words, the series presents an America that has an inclination toward the Antichrist. This picture of America is based on “dispensationalism,” a theology which has been prevalent in the tradition of the evangelicals and fundamentalists in the U.S.

These conservative Protestants are usually considered to hold the view that America is “a Christian nation.” This general perception has been reinforced repeatedly by their own behaviors. The most conspicuous recent example is their support for George Bush, Jr. who promulgates the notion of America as the “Redeemer Nation.”

However, as is suggested in the LBS, the dispensationalist America is one of

* 広島経済大学経済学部助教授

the anti-Christian nations which have been part of the ever-deteriorating present world order controlled by Satan and which are destined to be put under the rule of the Antichrist who will appear in the near future. This is an America moving in the opposite direction from that presented by Bush, Jr.

This paper will attempt to put together the fragments of the anti-Christian-America theme found in the evangelical/fundamentalist interpretive tradition between the late nineteenth century and the present, and to place the LBS in the historical context, thus bringing into relief the continuity and strength of this darker view of the nation in American society.

はじめに

アメリカでは1995年から2004年にかけて、あるフィクション・シリーズが計十二巻出版され、第一巻の650万部を筆頭に、これまでに延べ6,200万部以上の記録的な売り上げを達成し、大人向けのこの種類のものとしてはアメリカ出版史上空前のヒットへと成長している。ティム・ラヘイ (Tim LaHaye) とジェリー・ジェンキンズ (Jerry Jenkins) の共著による「レフト・ビハインド (*Left Behind*)」シリーズ (以下 LBS と略記)⁽¹⁾ である。

LBS で描写されるアメリカは、早い段階で、「反キリスト (Antichrist)」⁽²⁾ に制圧され、彼の支配する新世界秩序の一部に組み込まれる。また、当シリーズで描かれる反キリストの政策の中には、1990年代初頭以降のブッシュ父子の政策との連続性を持つものが含まれている。つまり、そこには、反キリスト方向のベクトルを持つアメリカの姿が示されているのである。LBS のアメリカ観は、「デイスペンセーションナリズム (dispensationalism)」⁽³⁾ と呼ばれる神学に基づいている。この神学は「福音派 (evangelicals)」または「原理主義者 (fundamentalists)」の伝統の重要な一部であり、当シリーズの共著者であるラヘイとジェンキンズもこの伝統に属する。

一般的に、福音派や原理主義者といえ、非常に愛国主義的で、アメリカはキリスト教国であると考えているようなイメージがある。また、実際に、彼らの間ではそのような言動が目立ってきた。最近の彼らは、アメリカは「救世主国 (Redeemer Nation)」⁽⁴⁾ であると主張するブッシュ大統領を支持することで、このようなイメージをますます強めている。

だが、LBS の例が示すように、デイスペンセーションナリズムにしたがえば、アメリカは、近い将来、反キリストの支配下に置かれる「諸国 (the nations)」の一

つである。また、過去、現在においても、それはサタンが支配するこの世の秩序の一部であり、その性格上、「反キリスト教的 (anti-Christian)」傾向をもっており、その傾向は終末に向けて強まるとされる。つまり、彼らのアメリカ観とブッシュのそれとは、真逆の方向性を持っているのである。

アメリカ宗教史の分野において、福音派や原理主義者の間での「反キリスト教国アメリカ (an anti-Christian America)」論とでも言うべき思想の存在は、1970年代末以降の少数の研究者によって、「断片的に」指摘されてきた。ティモシー・ウェバー (Timothy Weber) はアメリカの「前ミレニアム説 (premillennialism)」の歴史的考察において、ジョージ・マーズデン (George Marsden) はアメリカの「原理主義 (fundamentalism)」の歴史的考察において、「反キリスト教国アメリカ論」に関して部分的かつ間接的に触れた⁽⁵⁾。この思想の歴史を最も直接的に取り上げたのが、ポール・ボイヤー (Paul Boyer) である。だが、彼の研究の対象は1945年以降が中心であり、それ以前についてはあまり掘り下げられていない⁽⁶⁾。

このような先行研究によって、反キリスト教国アメリカ論の歴史の断片はすでに発見されているが、それらは一つの持続的テーマとしての像を結ぶには至っていない。また、ボイヤーの研究が出た1992年以降のアメリカ社会では、LBS の記録的なヒットにより、それに含まれる反キリスト教国アメリカ論がかつてない広がりを見せているにもかかわらず⁽⁷⁾、その存在はブッシュ大統領の救世主国アメリカ論にかき消される傾向にある。

本稿では、まず、19世紀末から現在に至るまでの福音派・原理主義者の聖書解釈の伝統に見られる反キリスト教国アメリカ論の断片をつなぎ合わせた上で、その歴史的文脈の中に最近の LBS を位置づけ、アメリカ社会におけるこの悲観的国家観の根強さを浮き彫りにしてみたい。

1. ディスペンセーションナリズムの歴史観

福音派・原理主義者の反キリスト教国アメリカ論を考察するための出発点として、彼らに影響を与えたディスペンセーションナリズムの特徴を概観しておこう。まず、それは「前ミレニアム説」の一種である。前ミレニアム説によると、この世の秩序は次第に悪化しており、間もなく破局的終末を向かえる。その後、キリストが再臨し、地上に「ミレニアム (millennium)」⁽⁸⁾、すなわち「千年王国」を設立する。つまり、キリスト再臨はミレニアム設立の「前」である。ウェバーによると、前ミレニアム説は神学と言うよりもむしろ「独特の歴史観」である。「前ミレニアム主義者は人類の進歩という一般的な考え方を拒否し、歴史とは正義が勝つことのでき

ないゲームであると信じている。…歴史の唯一の希望はその破壊にある⁽⁹⁾」。

前ミレニアム説には様々な種類のものがあるが、この前ミレニアム説の最大の特徴は、「直解主義 (literalism)」に基づき、聖書中の「イスラエル」という語と「教会」という語を厳密に区別する点にある。ちなみに、「教会」とは真のキリスト信者からなる「見えない教会」のことである。神の計画における主人公はイスラエルであり、教会はイスラエルがキリストを拒否したために、急遽、歴史に挿入された「括弧」のような存在にすぎない。現在、神のイスラエル計画の実行は一時停止しているが、それは間もなく再開される。その前に教会は天空に引き上げられ、彼らを迎えに来たキリストと空中で合流する。この現象は「ラプチャー (rapture)」⁽¹⁰⁾と呼ばれる。

ラプチャーの後、かつてのローマ帝国の復活となる欧州十ヶ国の指導者として、反キリストが台頭し、復活したイスラエル国家と偽りの平和条約を結ぶ。この平和条約締結をもって、「艱難 (tribulation)」と呼ばれる、人類が未だかつて経験したことのない苦難の七年間が始まる。艱難の中間時点で反キリストはイスラエルとの約束を破棄し、自らを神として崇めるようユダヤ人に強要し、それを拒む者を弾圧する。神は怒り、地上に次々と災難を降り注ぐ。最後に反キリスト率いる諸国の軍勢が、東西南北からイスラエルに迫り、「ハルマゲドン (Armageddon)」と呼ばれる丘で神とサタンとの最終戦争が勃発する。この時、キリストがラプチャーされたキリスト信者とともに地上に降臨し、サタンの勢力を破壊する。その後、キリストの支配する平和な千年、すなわちミレニアム⁽¹¹⁾が始まる。これがデイスペンセーションナリズムの概略である。

2. 反キリスト教国アメリカ論の形成過程：1875年～1918年

デイスペンセーションナリズムを受け入れた者たちは、アメリカと反キリストの関係について、これまでどのように考えてきたのであろうか。次の二章で行う主な作業は、「はじめに」で挙げた先行研究の中から、反キリスト教国アメリカ論に関連する部分を掘り起こし、時系列に並べることである。ただし、部分的に一次資料による補強も行う。時代の区切り方としては、この思想の形成期に当たる19世紀末の金ぴか時代から第一次世界大戦終了時までと、その継承の段階である第一次世界大戦後から現在に至るまでとに分けることとする。

デイスペンセーションナリズムは1862年から1877年にかけて、イギリスのプリマス・ブレズレン (Plymouth Brethren) の指導者ジョン・ダービー (John Darby) によってアメリカに伝えられた。それは1875年に始まった聖書預言会議運動などを

通じて、主に北東部や中西部の保守的福音派の間で支持者を増やしていった⁽¹²⁾。このとき、この神学が当時の北部福音派教会に広まっていた「キリスト教国アメリカ (a Christian America)」論への批判としての性格を有していた、という点を振り返ってみることは重要である。

南北戦争後の北部の教会は、戦前の福音派による様々な社会改革運動（反奴隷制運動はその代表例）の成果により、アメリカ文明はキリスト教精神を十分吸収した、との自己満足に浸っていた⁽¹³⁾。当時の北部の教会に関して、歴史家シドニー・ミード (Sydney Mead) は、「政教分離という公の制度の下で、ナショナリズムや自国の政治経済体制と、キリスト教史上、前代未聞の完全同一化に至った」と述べている⁽¹⁴⁾。

当時の「ディスペンセーションナリスト (dispensationalist)」は、アメリカ文明とキリスト教を同一視するこのような考え方を非現実的であるとして批判した。実際には、アメリカは漸次悪化しつつあるこの世の秩序の一部であり、決して一般に言われているほどキリスト教的ではない。そのことは、「時代のしるし (signs of the times)」を見れば明らかである、と彼らは主張した。殺人、自殺、窃盗、強制わいせつ、酩酊、離婚などの急増、都市に溢れかえる貧しい労働者階級の存在、彼らを搾取する資本家の強欲さ、両者間で頻発した紛争などは、彼らにとってはすべて終末が接近していることの「しるし」であった⁽¹⁵⁾。

19世紀末のディスペンセーションナリストは、しばしば統計を引き合いに出して、アメリカ社会の反キリスト教的性格を強調した。そのうちの一人、A・J・ゴードン (A. J. Gordon) は、1886年の預言会議で、1880年現在の合衆国の人口と支出の内訳に関して、「キリストと福音のため」のものと「自己とサタンのため」のものに分類した。人口の内訳については、「総人口5,014万5,783人」のうち、「プロテスタント教会員の895万3,870人」が前者、「カトリックの617万4,202人」と「名ばかりの者 (nominals) の3,502万7,801人」が後者に当たる。「名ばかりの者」とは「キリストの救いを公言せず、教会にも属さない者」として定義されている。支出の面では、「キリストのための一ドルに対して、自己またはサタンのために八ドル」使われた。ゴードンはこのような統計を挙げた上で、「この政府はキリストのものか、それともサタンのものか」と問いかけた⁽¹⁶⁾。その答えは当時のディスペンセーションナリストには明らかであった。アメリカは、キリストの側というよりも、むしろ圧倒的にサタン側にあり、しかも比重はさらに後者の側に傾きつつあるようであった。

彼らの悲観的な現状認識は次のような聖書解釈に基づいていた。今の時代は「異教徒の諸時代 (times of the Gentiles)」の一部である。それはユダヤ人のバビロン

捕囚に始まり、キリストの再臨で終わる。その間、この世の支配権はいったんサタンに明け渡され、神の民であるユダヤ人は、四つの異教帝国（バビロン、ペルシア、ギリシア、ローマ）に順次支配される。異教徒の諸時代における人間の統治形態は、君主制の漸次崩壊によって特徴付けられ、最終的には民主主義が台頭する。その結果、世界は混乱し、抑制の効かない暴徒による支配に陥り、人々は平和と安全の回復を求めて、反キリストに頼る⁽¹⁷⁾。このような歴史観において、アメリカの代表的な価値観の一つである民主主義は、反キリストの台頭につながる時代のしるしであり、懐疑の対象であった。

この歴史観は社会改革に対する懐疑心にもつながった。デイスペンセーションリストは、資本主義の生み出した劣悪な社会状況に対する批判という点では、社会改革者と共通部分があった。前者の中には、終末に再建され神に滅ぼされる富と墮落の大都市「バビロン (Babylon)」とは、ニューヨークのような世界の商業中心地である、と主張する者もいた。彼らは、そのバビロンから反キリストが台頭すると考えていた。その一方で、彼らはそのバビロンの社会を改善しようとする動きに対しても同様に批判的であった。滅びつつあるこの世の秩序を改善しようとすることは、サタンの支配を長引かせることである、と考えたからである。20世紀初頭の「革新主義 (Progressivism)」はそのような見地から批判された。極端な場合には、福音派の伝統的な関心事であった禁酒運動までもが彼らの批判を受けた。彼らの社会批判と社会改革批判は双方とも、アメリカ社会がサタンの手中にあるという彼らの基本的現実認識から派生したものであった。

とはいえ、彼らのすべてがアメリカ社会の改革から完全に手を引いたわけではなかった。中には、ラブチャーまで社会改革にかかわろうとする穏健派もいた。彼らは、アメリカをキリスト教化しようとした南北戦争以前の福音派の社会的関心を捨て切れなかった。また、穏健派の態度は、デイスペンセーションリズムの性格自体にも起因している。それは、キリストの再臨が「切迫している (imminent)」と説く一方で、その具体的な日付の設定を避けたため、キリスト再臨がすぐ起こるかもしれないし、しばらく延期されるかもしれない、という恒常的緊張感を生み出した。穏健なデイスペンセーションリストたちは、キリスト再臨の前にこの世を改善することは基本的には不可能だとしても、それまでに「地の塩 (salt of the earth)」または「世の光 (light of the world)」として、サタンや異教徒の支配者に対して「後方部隊的な妨害行動」に出ることは十分可能であると解釈した。このような穏健派は、禁酒運動をはじめ、反売春運動、市政改革、社会福祉活動などにかかわっていった⁽¹⁹⁾。

このような穏健派の解釈は、キリスト信者がアメリカから消滅するキリスト再臨時（厳密にはラブチャー）までという限定付きながら、アメリカがキリストのための力となれる余地をかりうじて残した。だが、デイスペンセイションリストの解釈におけるアメリカの地位は、神の民としてのそれではなかった。第一次世界大戦直前には、彼らの指導者の一人、ロバート・ラッセル（Robert Russell）の口から、来るミレニアムにおいて世界の支配者となるのはイスラエルであるが、「偉大なアメリカ共和国の国民である我々」は、キリスト再臨の前にラブチャーされるので「嫉妬を感じる必要など全くない」、という慰めともあきらめともつかない発言が聞かれた。⁽²⁰⁾

1914年の第一次世界大戦勃発は、アメリカ国内の愛国主義の異常なまでの高揚を招き、デイスペンセイションリストの悲観的国家観への挑戦となった。彼らの反キリスト教国アメリカ論は、この時代の洗礼を経て、その原型を固めていく。戦中の彼らの多くが、サタンの支配するこの世の秩序の改善にかかわるべきではないとして、反戦の立場を取った。このような態度は1917年のアメリカ参戦後、戦争支持派の現代主義神学者から、愛国心が欠如しているとして非難されることとなった。こうした非難への反動として、デイスペンセイションリストは次第に愛国主義を強め、1918年春までには運動全体として戦争支持に回る。⁽²¹⁾

だからといって、彼らが反キリスト教国アメリカ論を捨てたわけではなかった。確かにこの戦争は彼らのアメリカ観にとっては挑戦となったが、彼らの世界観全体に対しては、かつてない信憑性を与えた。まず、この世の秩序は崩壊の一途をたどる、という彼らの前ミレニアム説的主張が正当化された。また、より具体的には、この戦争にともなう欧州の国境線の引き直し、聖書預言にある終末のローマ帝国復活を連想させた。さらに、1917年11月2日のパルフォア宣言で、パレスチナでのユダヤ国家再建に対するイギリスの支持が表明され、その直後、オスマン帝国が崩壊し、エルサレムがイギリスの手に渡った。このような中東情勢の展開は、終末にイスラエルの国家が再建されるという聖書預言が、目の前で成就しつつあるような感を与えた。同年のロシア革命も、終末にイスラエルを攻撃するとされた北部連合の現実化としてとらえられた。⁽²²⁾

このような世界情勢の展開により、終末のドラマの主演、すなわちイスラエル国家と、それを滅ぼそうとハルマゲドンに集結するとされる諸国の輪郭らしきものが、次第に明確な形を取るにつれ、デイスペンセイションリストはアメリカの位置についても改めて意識せざるをえなかった。アメリカ参戦の約1年後の預言会議では、神の計画での「諸国」の運命という文脈において、アメリカのそれも暗示された。

旧約聖書では、人類が神に背を向け、偶像崇拜に陥ったために、神は人類を諸国に分割したとある。それ以来、人類は墮落の一途を辿ってきた。神に対する諸国の反抗は、最終的には反キリストの指揮下で神の民を全滅させる企ての形を取る。キリスト再臨の際は、神の民が救済される一方、諸国は神の民をどう扱ったかという基準で裁かれ、ミレニウム参入の可否が決定される。アメリカは名指しこそされなかったが、その運命が諸国の運命と軌を一にしているという暗黙の了解が見られた。⁽²³⁾

その一方で、この頃には、この世の秩序からの徹底的な分離を説いていた最も極端な者までもが、自らの神学の許容範囲内で、アメリカが戦乱の世界の中でキリストのための力になれる余地を探った。その一人、アルノ・ゲイブレイン (Arno Gaebelein) は、アメリカのキリスト教徒が聖書を読むことで、アメリカはこれからも神の祝福を得ることができると言った。また、アメリカが参加した戦争に伴う一連の国際情勢の動きを利用して、神がイスラエル国家再建への道を開いたという点に着目し、神の計画での脇役の一つとしてのアメリカの役割を示唆した。⁽²⁴⁾

しかし、彼らの目にはアメリカの「反キリスト教的側面」もはっきりと映っていた。彼らの運動の中心人物、ウィリアム・ライリー (William Riley) は同じ会議において、「世界を民主主義にとって安全にする」というウッドロー・ウィルソン (Woodrow Wilson) の戦争スローガンを批判して、民主主義の過度な賛美は反キリストの台頭につながると警告した。ライリーは終戦直後の預言会議でも、世界の恒久平和実現のための「国際連盟 (League of Nations)」というウィルソンの構想について、反キリストの台頭を可能にするとして批判した。このようなウィルソン批判、または民主主義批判・国際連盟批判は、当時のデイスペンセーションリストの多くに見られた。⁽²⁵⁾

このように、南北戦争以降、徐々に輪郭を現したデイスペンセーションリストの反キリスト教国アメリカ論は、第一次世界大戦中のナショナリズムの洗礼を受けることで、かえってその耐久性を証明することになった。それによれば、アメリカは神の民ではなく、遠い昔から神に逆らってきた「諸国」の一つである。サタンの支配下にあるこの世の秩序の一部であるアメリカは、キリスト教的というよりもむしろ反キリスト教的色彩が圧倒的に強く、その傾向は終末に向けてさらに強まっている。アメリカ政府も基本的にはサタンのものであり、その政策には反キリスト台頭への道を開くものもある。このようなアメリカにあって、少数派のキリスト教徒は後方部隊的な妨害工作しかできない。その彼らもやがてラプチャーによりアメリカから消滅する。その後のアメリカは諸国の一つとして、ラプチャー後に台頭する反キリストの支配下に入る。最終的には、アメリカはハルマゲドンで神の民の絶滅を

企てる諸国の軍勢の一部となり、そのとき再臨するキリストに裁きを受ける。これがこの思想の原型である。

3. 反キリスト教国アメリカ論の継承過程：1918年～現在

こうして固まった反キリスト教国アメリカ論は、第一次世界大戦以降、現在に至るまで、多少の揺れはあるものの、基本的にはそのまま継承されている。本章では、その継承の過程を簡単に追ってみよう。

第一次世界大戦によりかつてない信憑性をえたディスペンセーションナリストは、1920年代に入るとその勢力をさらに拡大していく。この段階に至って彼らの運動は、「原理主義」と呼ばれるようになる。このとき彼らは、それまでの反キリスト教国アメリカ論をわきに置き、アメリカにおける「キリスト教文明」の生き残りをかけて、プロテスタント教会から現代主義神学を、公立学校から進化論を追放しようとし始めた。彼らはアメリカの「多数派」の代弁者を名乗り、反キリスト教国アメリカに置かれた少数派という意識を一時的に忘れたようであった。⁽²⁶⁾

原理主義は1925年の「スコープス裁判」(または「猿裁判」)を最後に、主流教会や主流文化からしばらく姿を消し、独自のサブカルチャーの組織的基盤作りの段階に入る。それとともに、今では原理主義者と呼ばれるようになったディスペンセーションナリストたちの間で、反キリスト教国アメリカ論が再び息を吹き返す。大恐慌の1930年代に入ると、終末に再建される反キリストの都市バビロンは世界の商業中心地である、とする以前の資本主義批判が再び聞かれるようになった。それと同時に、彼らの反改革主義も復活した。彼らは資本主義の生み出した諸問題の解決を試みたニューディール政策に対して批判的態度を取った。「全国復興局 (National Recovery Administration)」の象徴であった「青いワシ」は「獣の刻印 (mark of the beast)」である、と主張する者もいた。ヨハネの黙示録によれば、獣の刻印とは、終末において反キリストが全世界の人々に対して要求する忠誠のしるしのことであり、これがなければ売り買いができないとされる。⁽²⁷⁾ ディスペンセーションナリストには、当時のアメリカ政府の政策は、第一次世界大戦のときと同様、反キリスト台頭への道を開いているように見えた。

中には、神の民、ユダヤ人の迫害者として台頭したヒットラーが反キリストであり、アメリカはヒットラーを転覆させるキリスト側の勢力の一部であると解釈する者もいた。第二次世界大戦が始まると、敵国の指導者を反キリスト候補に見立て、同盟国の勝利を聖書預言の中に見出す者も現れた。だが、より一貫したディスペンセーションナリストたちはそうした見解を否定した。さらに、彼らは戦後設立された

「国際連合 (United Nations)」(以下 UN と略記) に対しても、第一次世界大戦後の国際連盟に対してと同様、それによって平和な世界は訪れないとして、批判的態度を取った。⁽²⁸⁾

1945年、日本に落とされた二つの原爆は、現在の世界秩序が間もなく滅亡するという彼らの主張にかつてないリアリティを与えた。また、1948年に実現したイスラエル国家再建は、いよいよ終末のカウントダウンの始まりを告げているようであった。⁽²⁹⁾ このような世界情勢の中、反キリスト教国アメリカ論はさらに先鋭化する。⁽³⁰⁾

ポイヤーによれば、第二次世界大戦以降のアメリカ社会では、政治家の発言以外では、以前の救世主国アメリカ論は完全に崩壊し、「邪悪さに埋もれ、混乱の縁でおののく国という描写」が以前にも増して目立つようになった。デイスペンセーションナリストたちは現代アメリカを古代の「ソドムとゴモラ (Sodom and Gomorrah)」またはバビロンと比較し、その暗黒面を強調した。軍事、経済、科学技術、世界教会協議会 (World Council of Churches)、テレビ・映画、エイズ、ポルノ、中絶、エイズ、男女平等憲法修正条項 (ERA)、ニューエイジ運動、悪魔崇拝、占星術、オカルト、同性愛、学校教育など、アメリカ社会のありとあらゆる側面が批判された。⁽³¹⁾ 彼らの民主主義批判・資本主義批判も健在であった。アメリカが旧ソビエト連邦の全体主義・共産主義との対峙により自己定義をした冷戦期においても、それは変わらなかった。⁽³²⁾

イスラエル再建以降、アメリカのデイスペンセーションナリストのほとんどは、イスラエルとその近隣諸国との間で争いが起こった際は、必ずと言っていいほどイスラエルを支持した。1956年、イスラエルがエジプトを攻撃した際、合衆国政府は UN 停戦案を支持したが、彼らはイスラエルの攻撃を支持し、彼らの政府にもそうするよう促した。神は常に、ユダヤ人を援助する諸国を祝福し、そうしない諸国を呪う、と信じていたからである。⁽³³⁾ 彼らはアメリカがそのどちらになるかの岐路に立っていると考えた。

1960年代のベトナム戦争の最中にも、彼らの反キリスト教国アメリカ論は聞かれた。デイスペンセーションナリズムの総本山、ダラス神学校 (Dallas Theological Seminary) の学長ジョン・ワルブールド (John Walvoord) は戦争のさなか著した本の中で、合衆国は現在、国力の最盛期にあるが、その様子は紀元前6世紀の滅ぶ直前のバビロンと酷似していると指摘した。また、かつて合衆国は神から特別な祝福を受けていたが、それを浪費した結果、いまや神の審判を待つ身となったと述べた。⁽³⁴⁾

1970年、ハル・リンゼイ (Hal Lindsey) は『地球最後の日 (The Late Great

『Planet Earth⁽³⁵⁾』において、「欧州共同市場 (European Common Market)」が、終末に復活するローマ帝国であり、その指導者として反キリストが台頭するという説を打ち出した。その一方で、アメリカは学生の反乱や共産主義者の破壊工作などにより弱体化し、西欧における反キリストの台頭とともに、西洋のリーダーとしての現在の地位を失うと主張した。また、1973年の著作では、アメリカは反キリスト帝国の一部として、ハルマゲドンで滅ぶであろうと、付け加えた⁽³⁶⁾。1970年代のアメリカは、ウォーターゲート事件、ベトナム戦争の泥沼の結末、エネルギー危機などを経験した。このような状況下で、彼らは、アメリカが神の怒りを買っている、という感覚をますます強めていった。⁽³⁷⁾

1980年代のディスペンセーションナリストの間では、ジェリー・フォルウェル (Jerry Falwell) やパット・ロバートソン (Pat Robertson) などをはじめとして、「宗教右翼 (religious right)」としての政治活動が目立ち始める。彼らは、19世紀末にまでさかのぼる穏健派ディスペンセーションナリストの社会改革の伝統を最大限適用して (時にはその範囲を超えて)、最終的には救いの希望のないはずのアメリカ社会の改革運動に身を投じた。彼らの見解には、神の計画でアメリカが特別な地位にあるとする、より古い見解の痕跡が認められることがあった。たとえば、フォルウェルは、現在のアメリカは霊的・道徳的に墮落しているが、神を重んじた建国父祖の精神に戻れば神の加護を再び得られると言ったり、旧ソ連からの攻撃に対して「神がアメリカを奇跡的に守られるであろう」と言ったりした。ロバートソンは1988年の大統領選挙出馬の際、アメリカ人が再び徳の高い指導者を選ぶなら、アメリカの没落の流れを逆転させ、神の加護を取り戻せるかもしれないと主張した⁽³⁸⁾。中には、アメリカの運命に関する楽観論と悲観論の融合を試みる者もいた。彼らは、アメリカはラブチャーまではキリスト教徒の影響力を通じて大国の地位を維持できるかもしれないが、ラブチャーで多くのキリスト教徒を失った後は急速に衰退し、反キリスト諸国の一つへと墮し、最後には再臨したキリストに滅ぼされる、と主張した⁽³⁹⁾。

このような「部分的」キリスト教国アメリカ論の出現は、1980年代末以降のディスペンセーションナリストが「声なき多数派 (Silent Majority)」としての自意識を強めたことと関連している。この点では1920年代の彼らの先駆者と共通している。80年代以降も20年代と同様、彼らの中で反キリスト教国アメリカ論とキリスト教国アメリカ論の間の揺れが見られる。しかし、結局のところ、彼らの重心は前者にあった。ポイヤーは「預言の中の合衆国」に関する考察を次のように締めくくっている。第二次世界大戦後の預言普及者のほとんどは「アメリカの運命を反キリストと

結びつけ、両者ともメギド [ハルマゲドンの別名] の平原で倒れるという暗い結論に達した。…ほとんど例外なく、戦後の終末論者は…合衆国が神の計画の中で特別な加護を受ける地位にあるという見解をもはや信じなかった。彼らが実際に信じたのは、その逆であった⁽⁴⁰⁾」。

1990年～1991年のペルシア湾岸危機のときも、同様のアメリカ論が聞かれた。アメリカの対イラク勝利はアラブ諸国を刺激して、後者によるイスラエル侵攻を誘発、やがてそれにロシアが加わる。そのイスラエル攻撃は、ラプチャーによりアメリカの軍事力・政治力が壊滅的な打撃を受けることによって可能となる⁽⁴¹⁾、と。つまり、終末のドラマにおけるアメリカの役割は、イラクと同様、神の計画における捨て駒の一つ、反キリスト教国の一つとしてのそれに過ぎなかった。

2001年9月11日の同時多発テロ事件（以下9・11と略記）は、彼らの反キリスト教国アメリカ論に対する一種の正当化として作用した。9・11はアメリカの運命に関する部分的楽観論を持っていたフォルウェルにも、その楽観論を見直させるだけの衝撃を持っていた。この事件の直後、フォルウェルはロバートソンのテレビ番組「700クラブ」に出演し、アメリカへのテロリスト攻撃は、米市民的自由連合（American Civil Liberties Union）や中絶提供者、同性愛者の権利の支持者、学校の祈祷に関する連邦裁判所の判決などにより、靈的に弱体化した国民への「神の審判」であると言った。アメリカの世俗化に怒った神が、アメリカから保護の「幕（curtain）」を引き上げたという主張であった。それに対してロバートソンは「全くそのとおりだ」と答えた。フォルウェル発言はすぐにリベラル諸団体からの批判を受けたが、それに加えて、ホワイトハウスのスポークスマンからも、ブッシュ大統領はそのような見解を共有しておらず、むしろ「不適切」であると考えている、と批判された。その直後、フォルウェルは発言を撤回した⁽⁴²⁾。

フォルウェル発言はデイスペンセーションリストの反キリスト教国アメリカ論の伝統に根ざす見解であったが、このような悲観的国家観はその後、アメリカ社会を覆いつくした愛国主義的言説とブッシュ大統領の救世主国アメリカ論とにかき消されることになった。デイスペンセーションリストを多く含む福音派・原理主義者はブッシュのイラク侵攻・再建を支持することで、より愛国主義的で楽観的な後者の見解と完全に一体化してしまったかのようなのである。だがその一方で、彼らの反キリスト教国アメリカ論は LBS を通して、ひそかに生き続けている。9・11の年、すなわち2001年に出版された第九巻がその年のベストセラーになったほか、それ以降一年ごとに出版された最後の三巻もすべて、ニューヨーク・タイムズ等のベストセラー・リストのトップに上った⁽⁴³⁾。本稿の最終章では、これまで考察してきた反キリ

スト教国アメリカ論の歴史の中に、LBS を位置付け、現代アメリカ社会におけるこの思想の根強さを確認してみたい。

4. LBS における反キリスト教国アメリカ論

LBS はラブチャー後の世界を描いている。シリーズ名の「レフト・ビハインド」とは、ラブチャーでキリスト信者が地上から消え去った後、「取り残されて」という意味である。物語はラブチャーで幕を開ける。世界が混乱に陥る中、人々は世界軍縮のカリスマ的唱道者であるルーマニアの青年大統領ニコライ・カルパチア (Nicolae Carpathia) にひきつけられていく。カルパチアは世界の人々の圧倒的支持を集め、やがて UN 事務総長の座につく。この人物こそが反キリストであった。カルパチアは UN を「グローバル・コミュニティ (Global Community)」(以下 GC と略記) という世界政府に改変し、世界各国の経済、軍隊、メディア、宗教を次々と統合、絶対的権力を手中にする⁽⁴⁴⁾。

LBS でのラブチャー後のアメリカの描写は、前二章で考察した反キリスト教国アメリカ論の流れを忠実に汲んでいる。第一に、LBS には、終末において衰退し、反キリストの支配下に置かれる諸国の一つとしてのアメリカ、という伝統的なテーマが、かつてないほどリアルに肉付けされている。この物語に登場するアメリカ大統領ジェラルド・フィッツヒュー (Gerald Fitzhugh) は、最初は世界の国家元首の先頭に立って、カルパチアの世界政策を支持する。しかし、彼の野望への危機感を次第に募らせ、ついにはエジプト軍、イギリス軍、アメリカのミリシアを結集し、GC 北米支部の置かれたワシントン D.C. に先制攻撃を仕掛ける⁽⁴⁵⁾。それに対して、GC 軍は直ちに造反諸国の主要都市への報復攻撃に出る。第三次世界大戦の始まりである。まず、第二巻の終わりで、ミリシアが密輸武器を備蓄していたシカゴのナイキ (Nike) 基地が爆撃される⁽⁴⁶⁾。第三巻が始まると同時に、アメリカの主要都市は次々と GC 軍の攻撃を受け、壊滅状態に陥る。フィッツヒュー大統領もワシントン D.C. への報復攻撃において殺される⁽⁴⁷⁾。

それ以降、アメリカという国はすっかり弱体化し、反キリストの君臨する GC の支配下に置かれる。第二巻の終わりでアメリカは、メキシコとカナダとともに GC 管轄の世界十地域の一つ、“United States of North America” (以下 USNA と略記) に事実上、併合される⁽⁴⁸⁾。第三巻以降、アメリカはその存在感をほとんど完全に失う。第七巻では、カルパチアが国連を GC に改名した際、USNA を “United North American States” に変更していたことが明かされる⁽⁴⁹⁾。アメリカの属する政体の名称が、もともとの国名の “United States of America” から徐々に崩されていく様

は、アメリカの政治的衰退の漸次進行を表して興味深い。

第二に、LBS には、反キリスト教勢力の圧倒的支配下にあるアメリカにおいて抵抗を続ける少数派キリスト教勢力、という伝統的なモチーフもみられる。ラブチャー後の LBS のアメリカにおいては、キリスト教勢力はラブチャー前よりもさらに矮小化している。第十二巻の最後では、ラブチャー後の世界の人口状況について要約されている。五億人以上がラブチャーされ、次の三年半に残りの人口の半数が殺され、その後も多くの人命が失われた結果（何百万人もの殉教者を含む）、ラブチャー時の人口の四分の一しか残っていない。そのうちキリスト信者は「わずか（scant）」である。⁽⁵⁰⁾ 反キリストの管轄下に置かれたアメリカにおいて、唯一、キリストのための残存勢力となっているのが、「トリビュレーション・フォース（Tribulation Force）」（以下 TF と略記）である。TF は、反キリストに対抗するために、ラブチャー後にキリストへ回心したアメリカ人を中心に組織化された秘密集団であり、シカゴの本拠地から全世界に散らばるキリスト信者を陰でネットワーク化していく。⁽⁵¹⁾

第三に、LBS には、ウィルソンの国際連盟構想の中に反キリスト台頭への第一歩を見て取った第一次世界大戦後のディスペンセーションナリストとの連続性がみられる。第一巻の中盤でカルパチア、すなわち反キリストは UN の歴史を次のように振り返る。UN は創設以降、冷戦構造のしがらみの中で次第に衰退していったが、1990年代に冷戦が終わると、ブッシュ大統領（父）の口から「新世界秩序」という言葉が聞かれるようになった。その言葉は「私の若い心に深く響いた」⁽⁵²⁾。ここではブッシュ（父）の新世界秩序構想が、反キリストの世界支配構想の前兆として描かれている。

さらに、LBS は、ブッシュ（子）のイラク政策と反キリストのそれとの連続性をも示唆している。LBS でのカルパチアの新世界秩序の中心地は「新バビロン（New Babylon）」である。その位置は、現在のイラク国内で古代バビロンのあった場所という設定である。LBS の第一巻の終わりに、カルパチアが UN をバビロンに移転したがっていること、この都市がすでに何年もの間、「何十億ドル」もつぎ込んで改修されつつあったことが述べられる。⁽⁵³⁾ 第一巻が出版されたのは、ブッシュ（子）がイラク侵攻に出る八年前のことであり、そこで既成事実とされているバビロン再建とは、当時フセインが推進していたバビロン再建計画を念頭に置いているものと考えられる。⁽⁵⁴⁾ だが、その後の事態の展開により、ブッシュがイラクの再建にかかわるようになったとき、LBS の世界から見れば、ブッシュがフセインに代わって反キリストのための準備を始めたように見え始めたのである。

この点について、LBS の副産物である「レフト・ビハインド預言クラブ」の2005年2月2日付電子版回報では、オクラホマ州エドモンズのフェイス聖書教会の牧師マーク・ヒッチコック (Mark Hitchcock) が、次のような見解を述べている。聖書によれば、終わりのときにはバビロンが反キリストの本拠地になるとされているが、「合衆国がイラク侵攻を率いる以前に、欧州の大指導者 [反キリスト] がイラクに強力な政治経済の中心地をどうして建設しえたであろうか。それは不可能に見えた。この国を掌握していたサダムがそれを決して許さなかったであろう」。つまり、アメリカのイラク侵攻が反キリストの本拠地バビロンの再建への道を開いた、という解釈である。さらに、イラク再建がこのまま進めば、「欧州諸国 (特に EU)」が新生イラクと「密接な関係を築き始めるであろう」。そのとき、反キリストが欧州の指導者として台頭し、バビロンでの存在感を増していく。ヒッチコックはこのように述べた後、「今日のイラクで起こりつつあることは、終末のバビロンに関する聖書預言の成就のために必要な前提条件 (pre-condition) または舞台準備 (stage setting) のように見える」と締めくくっている⁽⁵⁵⁾。

LBS の設定とヒッチコックの解釈からすれば、ブッシュのイラク侵攻・再建は長い目で見れば反キリストのバビロン再建のための「舞台準備」をしているということになる。アメリカの外交政策の中に反キリスト台頭への前兆を見出すこと自体は、ディスペンセーションナリストの伝統において目新しいことではない。だが、第一次世界大戦終了時のディスペンセーションナリストは、ウィルソンの世界構想に対して、それは反キリストの台頭につながるとして、はっきりと一線を画した。それとは対照的に、現在の彼らの後継者たちは、ブッシュのイラク政策が反キリストの台頭につながる可能性を意識しつつも、それをあえて批判しないばかりか、むしろ後押しさえしている。この点において、彼らはかつて彼らの伝統から逸脱しているといえる。

最後に、LBS は、諸国の一つとしてのアメリカの最終的な運命についても、伝統的な反キリスト教国アメリカ論を下敷きにして描き出している。ハルマゲドンでの戦いの最終局面で、アメリカは他の反キリスト諸国とともに神の裁きを受けて滅ぼされる。神は言う。「諸国よ、近くに来て聞くがよい。…何となれば、主の激怒はすべての諸国に対して、またそれらすべての軍隊に対して向けられているからである (強調は筆者)。神はそれらを完全に破壊した」。「アメリカにおいても、反キリストや彼の政府に仕える者は、主の口から発せられた言葉によって死んだのである (強調は筆者)⁽⁵⁷⁾」という記述もある。また、神の起こした世界規模の大地震により、エルサレムを除く地球の表面全体 (アメリカを含む) が平らにされる。その後、

神は諸国の審判に入る。神はまずユダヤ国民を神の民として復権させ、その他の諸国民については、神の民に栄誉を与えた「羊」と、栄誉を与えなかった「ヤギ」とに振り分ける。生き残った少数のキリスト信者は、前者として選別され、神の民とともにミレニアムに入ることを許される。その一方で、その時点まで何とか生き延びた数百万単位の不信心者は、後者として選別され、地獄へと送られる。こうしてアメリカ国民も二分される。そしてミレニアムにおいては、アメリカを含めた諸国はキリストの支配下に置かれるのである。⁽⁵⁸⁾ デイスペンセーションナリズムにしたがえば、この時点で初めて「キリスト教国アメリカ」が誕生することになる。

このように、LBS の反キリスト教国アメリカ論は、19世紀末にまでさかのぼるデイスペンセーションナリストの伝統的解釈に忠実に基づいており、それ自体には全く新しい要素は見られない。ただし、計十二巻を費やしてこれまで以上に詳細にわたってそれを描き出したという点、また、記録的な部数を売り上げたという点では、この伝統を強化する力となったといつてよいだろう。

おわりに

アメリカのデイスペンセーションナリストにとって重要なことは、アメリカが神の民としての使命を果たすことではなく、反キリスト教諸国の一つとして「それ相応の」役割を果たし、終末のドラマの舞台準備に貢献することである。終末の主人公はユダヤ人と反キリストであることからして、それはイスラエルと反キリストのための舞台準備ということになる。さらに、終末においてイスラエルは反キリストに乗っ取られるというシナリオからして、イスラエルのための舞台準備も、結局のところ、反キリストのためのお膳立てであると言ってもよい。いや、さらに長い目で見れば、反キリストの台頭もまた神の計画の一部であり、その意味ではアメリカの役割はめぐりにめぐってやはり神の使命を果たすことである、ということになるのであろうか。

この複雑な論理は一般の人々は言うまでもなく、アメリカ研究者の間でも十分理解されていない。だが、本稿で考察したように、福音派や原理主義者の伝統においては、この暗黒のアメリカ論は三世紀にまたがる長い歴史を有しており、現在のアメリカ社会においてもその勢いは衰えることを知らないのである。

注

(1) LBS は、Tim LaHaye & Jerry Jenkins, *Left Behind*, (Wheaton, Ill.: Tyndale House,

- 1995). に始まり、その後も同共著者、同出版社から、*Tribulation Force* (1996), *Nicolae* (1997), *Soul Harvest* (1998), *Apollyon* (1999), *Assassins* (1999), *The Indwelling* (2000), *The Mark* (2000), *Desecration* (2001), *The Remnant* (2002), *Armageddon* (2003), *Glorious Appearing* (2004) と立て続けに出版された。カッコ内の数字は出版年。売上部数についてはLBSの公式サイト、www.leftbehind.com を2005年11月に参照。2002年以降、いのちのこぼ社から第六巻まで邦訳が出ている。
- (2) アメリカ史における様々な反キリスト説を考察したロバート・フラーによれば、反キリストとサタンの関係はキリストと神の关系到類似している。つまり、前者は後者の「肉体化 (incarnation)」である。Robert Fuller, *Naming the Antichrist: The History of an American Obsession* (New York: Oxford University Press, 1995), 5 ; フラーは、アメリカ人が自らを神の祝福を受けた特別な国民であると考え、アメリカの生活様式に反するものを反キリスト同盟に属する敵としてとらえる傾向があった、という点を強調しており、アメリカ自体がその同盟の一部であるとする解釈については、ほとんど触れていない。Ibid., 4-5.
- (3) デイスペンセーションリズムの福音派・原理主義者の間での広がりについては以下参照。Paul Boyer, *When Time Shall Be No More: Prophecy Belief in Modern American Culture* (Cambridge: Harvard University Press, 1992), 3-8.
- (4) 拙稿「前千年王国説とナショナリズム—原理主義者のアメリカ観, 1914-1918年—」『アメリカ史研究』第27号 (2004年, アメリカ史研究会), 35-36 ; 「救世主国」という呼称は、歴史家アーネスト・テューヴソンによって広められた。Ernest Tuveson, *Redeemer Nation: The Idea of America's Millennial Role* (Chicago: University of Chicago Press, 1968).
- (5) Timothy Weber, *Living in the Shadow of the Second Coming: American Premillennialism, 1875-1982* (Chicago: University of Chicago Press, 1983 [1979]); George Marsden, *Fundamentalism and American Culture: The Shaping of Twentieth-Century Evangelicalism, 1870-1925* (Oxford: Oxford University Press, 1980).
- (6) Boyer, *When Time Shall Be No More* ; 拙稿「前千年王国説とナショナリズム」では、ポイヤーが掘り下げなかった時代の一部の第一次世界大戦前後について、彼らのアメリカ観を分析した。
- (7) LBS のアメリカ文化全体への浸透力については以下参照。Amy Johnson Frykholm, *Rapture Culture: Left Behind in Evangelical America* (New York: Oxford University Press, 2004), 25-26.
- (8) 20世紀末以降、日本でも「ミレニウム」という語が以前より一般的に用いられるようになり、「千年王国」という訳語よりも身近なものになっている。本稿でもこうした一般的傾向に倣い、“millennium” の訳語として前者を当てることにする。派生語についても同様に扱う。
- (9) Timothy Weber, “Premillennialism and the Branches of Evangelicalism,” Donald Dayton & Robert Johnston, eds., *The Variety of American Evangelicalism* (Downers Grove, Ill.: InverVarsity Press, 1991), 6.
- (10) この神学の特徴については以下参照。Ernest Sandeen, *The Roots of Fundamentalism: British and American Millenarianism 1800-1930* (Chicago: University of Chicago Press, 1970), 8, 66-70; Weber, *Living in the Shadow*, 17-21; Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, 52-54; Boyer, *When Time Shall Be No More*,

- 89.
- (11) 終末のシナリオの概略については以下参照。Weber, *Living in the Shadow*, 11, 23; Boyer, *When Time Shall Be No More*, 88.
 - (12) Sandeen, *The Roots of Fundamentalism*, 59–80.
 - (13) Robert Handy, *A Christian America: Protestant Hopes and Historical Realities* (New York: Oxford University Press, 1984 [1971]), 95; ヘンリー・メイは、1861年から1876年までを、北部諸教派の「自己満足の頂点」と形容している。Henry May, *Protestant Churches and Industrial America* (New York: Octagon Books, 1977 [1949]), 37.
 - (14) Sydney Mead, *The Lively Experiment: The Shaping of Christianity in America* (New York: Harper & Row, 1977) [邦訳 (野村文子訳) 『アメリカの宗教』, 日本基督教団出版局, 1978年], 157.
 - (15) このような「時代のしるし」の具体例については以下参照。Weber, *Living in the Shadow*, 41–42, 82–87; Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, 66–68; Boyer, *When Time Shall Be No More*, 93–95.
 - (16) A. J. Gordon, “Missions,” *Prophetic Studies of the International Prophetic Conference* (Chicago: F. H. Revell, 1886), 198, 203; 彼らの少数派意識については、以下でも指摘されている。Weber, *Living in the Shadow*, 70; 拙稿「ファンダメンタリストのカトリック観の変化—1878年～1918年—」『アメリカ研究』第36号 (2002年, アメリカ学会), 141–42.
 - (17) Weber, *Living in the Shadow*, 92–94; Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, 52.
 - (18) Weber, *Living in the Shadow*, 94–96; Boyer, *When Time Shall Be No More*, 93–95.
 - (19) Weber, *Living in the Shadow*, 96–101.
 - (20) 拙稿「前千年王国説とナショナリズム」, 38.
 - (21) Weber, *Living in the Shadow*, 117–25; Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, 143–53.
 - (22) Weber, *Living in the Shadow*, 105–57; Boyer, *When Time Shall Be No More*, 100–03.
 - (23) 「諸国」の運命とアメリカの運命との関係については、拙稿「前千年王国説とナショナリズム」, 40–41. を参照。
 - (24) *Ibid.*, 42.
 - (25) Weber, *Living in the Shadow*, 121–27; Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, 152.
 - (26) この時期の彼らの言動については、彼ら本来の性格から逸脱しているとする解釈 (サンディーン), それはディスペンセーションナリズムが許容する範囲内であるとする解釈 (ウエバー), 彼らは元々それほどディスペンセーションナリズムに影響を受けていなかったとする解釈 (マーズデン), の三つがある。Sandeen, *The Roots of Fundamentalism*, 169–70; Weber, *Living in the Shadow*, 169–76; Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, 5, 128, 149.
 - (27) Boyer, *When Time Shall Be No More*, 105–07.
 - (28) *Ibid.*, 108–12.
 - (29) *Ibid.*, 115–16.
 - (30) Weber, *Living in the Shadow*, 203–04.
 - (31) Boyer, *When Time Shall Be No More*, 230–37.
 - (32) *Ibid.*, 247–50.

- (33) Weber, *Living in the Shadow*, 209–10.
- (34) Boyer, *When Time Shall Be No More*, 238.
- (35) Hal Lindsey, *The Late Great Planet Earth* (Grand Rapids: Zondervan, 1970); 当著作は1978年までに900万部、1990年までに2,800万部を売り上げている。ニューヨーク・タイムズはそれを1970年代のノンフィクション部門のベストセラーと認定した。Boyer, *When Time Shall Be No More*, 5.
- (36) Weber, *Living in the Shadow*, 211–15; Boyer, *When Time Shall Be No More*, 251.
- (37) *Ibid.*, 238–39.
- (38) この種の楽観論については以下参照。Ibid., 239–44; Weber, *Living in the Shadow*, 237–38; この側面に着目すれば、彼らがナショナリズムと一体化しているという見方ができる。森孝一「アメリカの『見えざる国教』再考」『アメリカ研究』38 (アメリカ学会, 2004年).
- (39) リンジーはその一例である。Boyer, *When Time Shall Be No More*, 251–52; LBS の共著者の一人、ラヘイも同様の見解をもっている。この点については、彼の公式サイトに掲載されている“Pre-Trib Newsletter”1999年8月号を参照した。Tim LaHaye, “The Role of U.S.A. in End Times Prophecy,” www.timlahaye.com, 2005年11月参照.
- (40) Boyer, *When Time Shall Be No More*, 253.
- (41) *Ibid.*, 327–31.
- (42) Gustav Niebuhr, “A Nation Challenged: Placing Blame; Falwell Apologizes for Saying an Angry God Allowed Attacks,” *New York Times*, September 18, 2001.
- (43) www.leftbehind.com, 2005年11月参照.
- (44) カルパチアはルーマニア生まれだが、イタリア人の血を引いているという設定であり、反キリストは西欧から出現するという伝統的解釈を踏まえている。LaHaye & Jenkins, *Left Behind*, 270; カルパチアの世界征服は第二巻の終わりまでに完了する。
- (45) *Ibid.*, 440–41.
- (46) *Ibid.*, 440–43; ナイキ基地とは1950年代半ばに米陸軍が建設を始めた対空ミサイル発射用の基地である。
- (47) ニューヨーク、ダラス・フォートワース、シカゴ、ロサンゼルス、サンフランシスコ、ワシントン D.C. の順で GC の報復攻撃を受ける。LaHaye & Jenkins, *Nicolae*, 8–9, 14–15, 63–64, 94–95, 126–27.
- (48) LaHaye & Jenkins, *Tribulation Force*, 364, 444.
- (49) LaHaye & Jenkins, *The Indwelling*, 80–81.
- (50) LaHaye & Jenkins, *Glorious Appearing*, 374.
- (51) TF の説明については、LaHaye & Jenkins, *Left Behind*, 428. を参照。TF 以外にも、アメリカの元ミリシア集団や世界のユダヤ教徒・イスラム教徒の諸集団が、最後まで獣の刻印を拒む「反」反キリスト勢力として描かれている。LaHaye & Jenkins, *Armageddon*, 148.
- (52) LaHaye & Jenkins, *Left Behind*, 252.
- (53) *Ibid.*, 352–53.
- (54) フセインのバビロン再建計画については、Boyer, *When Time Shall Be No More*, 330. を参照。
- (55) Hitchcock, “Babylon’s Future: Iraqi Democracy and the Future of Babylon,” February 2, 2005, www.leftbehindprophecy.com.

- (56) LaHaye & Jenkins, *Glorious Appearing*, 225.
- (57) *Ibid.*, 360–61.
- (58) *Ibid.*, 275, 362–63, 367–68, 380–81, 395.